
息もできないほど抱きしめていて

二十三日月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

息もできないほど抱きしめていて

【著者名】

N4667D

一十二日月

【あらすじ】

「もう恋なんていつでもいい」—恋愛に対しても臆病な「私」が、「キミ」と出会いどんどん変化していく毎日を鮮明に綴る。

序章 夢の中に落ちひらく前に

＝序章＝ 夢の中に落ちるその前に

キミに逢えない夜は

「もう陽が昇つてこないんじゃないかな・・・」

そう思えてしまうほどに

1分、1秒が長い。

早く眠つてしまえば

こんな寂しさからは解放されるのだと

無理矢理目を瞑つてみても

冷たい布団が

眠りに落ちるのを妨げてくれる。

ふと

枕元に置いておいたキミ専用の携帯電話を手に取つてみた。
時間は24時を回つたあたり。

キミがバイト先を出る時間。

いつも終わつてすぐキミから電話がかかってくるのに
こうこう田に限つてなかなか着信音はなつてくれない。

キミの声が聞きたくて。

どうしようもなく聞きたくて。

思はず

「電話、してもいいかな」とメールを送りつとしたまごとの瞬間
キミから電話がかかってきた。

「おう、お疲れさん。今終わつたところだよー」

低すぎず、高すぎない、優しいトーン。

さつきまでの孤独感はどこへなりと消え去り

私の世界は色鮮やかに輝き出した。

そして、驚いたのと、緊張が緩んだのがいまつて、
目から一筋の涙が流れた。

私はキミの声を聞いているだけで
こんなにも穏やかな気分になつて

こんなにも世界中の幸せを独り占めした心地になる。

愛しい人。

本当は今宵このままキミの元へ飛んでいきたい。
だからせめて

夢の中だけは

息もできないほど私を抱きしめていて。。。

＝ 第1章 ＝ に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4667d/>

息もできないほど抱きしめていて

2010年10月11日00時44分発行